

## セミナー「ダンス・アーカイブの手法」報告(2014年4月)

### はじめに

セゾン文化財団では2014年4月から、コンテンポラリーダンスのアーカイブの可能性とその手法について考えるセミナーを、振付家を対象に開始した。

この数年、作品のアーカイブや若手への振り移しなどに関心を持つダンス関係者が増えており、当財団も1987年の設立以来、様々な作品の誕生に、支援させていただきながら「ダンスに最適なアーカイブの方法は何だろうか」と考えてきた。

そのような時に、「ダンスのアーカイブは博物館の収蔵庫にしまっておくようなものではなく、誰かによって、創作のために使われるときにはじめて活きるのではないか」という問いかけを、シンガポールの劇団〈シアターワークス〉の芸術監督兼「シンガポール・インターナショナル・フェスティバル・オブ・アーツ(以下SIFA)」の芸術監督であるオン・ケンセン(Ong Keng Sen/王景生)から受けたのが、今回のセミナーを企画するに至ったきっかけである。

本プロジェクトは、作品を資料としてアーカイブしたり、レポーターとして残したりするのではなく、アーカイブされた作品が、新たなダンスの作り手に渡り、再び創作されるまでの経緯を辿ってみることに、アーカイブの方法や可能性を探ってみようという企画で、当財団が運営する森下スタジオにて行うことになった。

まずは本年4月に、アーカイブの目的の共有や作品選定、創作の背景などをリサーチし、自身の作品のアーカイブのイメージを捉えた上で、12月に実際に稽古場に入り、アーカイブ化の作業を重ねる計画だ。

このような作業に「アーカイブ」という名称が相応しいのかという問題はさておき、これが新たな創作の方法としての「アーカイブ」を考える機会になればと思う。

### 4月のセミナーについて

2014年4月11日(金)から4月15日(火)までの5日間にわたり、森下スタジオにおいて、セミナー「ダンス・アーカイブの手法」が開催された。

ファシリテーターとして、オン・ケンセン、ダンスドラマトウルクの中島那奈子、ダンス批評の武藤大祐の3名が、また振付家・ダンサーとして、伊藤千枝、黒田育世、近藤良平、白井剛、鈴木ユキオ、手塚夏子、矢内原美邦、山下残の8名が参加した。

今回のセミナーは、①外部の講師を招いて行う「ラージグループセッション」(計2回)、②振付家・ダンサーが2名ずつでアーカイブに関する考えや自身の作品等についてお互いに、あるいはファシリテーターと一緒に

意見交換を行う「スモールグループリサーチ」(計4回)、③ファシリテーターと振付家・ダンサーがアーカイブの手法について語り合う「ワークショップ」(計2回)、④限定公募された次代のゲスト振付家との「ディスカッション」、⑤5日間の話し合いの過程でそれぞれの振付家・ダンサーが考えた“自分で自分の作品をアーカイブする”ことについて語る「公開プレゼンテーションとディスカッション」という構成で実施された。

初日の午前中は、本セミナーの発案者であるオン・ケンセンが、ダンスをアーカイブするための新しい手法に関する考え(アーカイブは「レポーター」とは異なり、また単なる「保存」を超えたものであるべきではないのか)や、アーカイブをつくるとき目的と未来の創作に貢献する可能性について語り、参加者のアーカイブのイメージを共有するための意見交換が行われた。午後には、各振付家・ダンサーが、画像や動画、あるいは過去の作品プランなどを見せながら自分の活動について紹介した。

二日目の午前中には「ラージグループセッション1」として、振付家・ダンサーの川口隆夫を講師として招き、『川口隆夫ソロ 大野一雄について』におけるアーカイブの手法」というテーマで、上述のメンバーと、募集で参加した聴衆に向けて語って頂いた。内容としては、2013年8月に東京のd-倉庫の〈ダンスがみたい!〉、および同年10月に横浜のBankART Studio NYKで行われた〈大野一雄フェスティバル2013〉にて同氏が演出し、上演したソロ作品『大野一雄について』を事例に、大野一雄の作品を完全コピーして創作した経緯と方法、またそこから得た発見などについて、同公演の記録ビデオや、踊りをコピーするために描いた多数のスケッチを見せながら紹介し、質疑応答が行われた。同日午後には、上記のセッションの内容を受けて、ファシリテーターと参加振付家・ダンサーによる最初の「ワークショップ」が行われ、自分のアーカイブが他人に使われたらどう思うか、あるいは自分ならどのようなアーカイブを残すかなど、「アーカイブの目的」などについて意見交換が行われ、アーカイブと芸術作品における「正確さ」と「謎めいた部分」の問題、アーカイブを「道具箱」として捉えるなどのアイデアが提示された。その後、白井剛と山下残による「スモールグループリサーチ」が行われた。

続いて三日目の午前中の「ラージグループセッション2」には、インスタレーションや映像、写真、パフォーマンスなどの作品を創作している現代美術家・演出家、秋田公立美術大学ビジュアルアーツ専攻准教授の高嶺格を講師に迎え、「自身の作品とアーカイブについての考え」というテーマのもと、セミナーのメンバーと、前日同様聴衆を交えて話し合いが行われた。同氏は自身の活動についてビデオを見せながら紹介し、自分の体験(恐怖心や安心感)や疑問をいかにインスタレーションや映像などの形



文化庁委託事業「平成26年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」  
世界で活躍する新進芸術家のためのスキルアップセミナー  
主催:文化庁、公益財団法人セゾン文化財団  
制作:公益財団法人セゾン文化財団



4月11日 オン・ケンセン氏によるアーカイブの目標説明等  
Photo: 今津聡子



4月12日 川口隆夫氏(左)によるラージグループセッション1



4月13日 高嶺格氏(左上)によるラージグループセッション2



4月14日 次代のゲスト振付家とのディスカッション



4月15日 公開プレゼンテーション

で作品化してきたかについて語った。また、現在メディアアート界が直面している、旧来のテクノロジーや電子機器、OSなどのソフトウェアを使用して作られた作品が、技術の進化によって再現(およびアーカイブ化)出来なくなる可能性があるという問題や、過去のメディアアーティストの作品を最新の技術で再現することに対する可否と、どこまでを原作(者)の意図として捉えるべきかを問う「再解釈」の議論が行われていることを紹介し、美術界においても、作品をいかに後世に残すかというのが大きなテーマになっていると伝えた。午後に開催された「ワークショップ2」では、各ファシリテーターが、自身の活動とアーカイブに対する考え方を紹介し、アーカイブを誰に向けて作るのか、アーカイブには将来に向けた「可能性」が潜在的に伴うのではないかなどの議論が交わされた。その後、鈴木ユキオと矢内原美邦による「スモールグループリサーチ」が行われた。

四日目の午前中には、黒田育世と手塚夏子、および伊藤千枝と近藤良平のそれぞれによる「スモールグループリサーチ」が開催された。同日午後には、今回の参加振付家・ダンサーと、当財団の呼びかけで集まった8名の新進振付家をゲストに迎えた「ディスカッション:ダンス・アーカイブの手法について」が開かれ、ファシリテーターによる本セミナーの説明に続き、今回参加している1990年代~2000年代から活躍中の振付家・

ダンサーに影響を受けたゲスト振付家たちのコメントをもらい、アーカイブに対する意見を交わした。ディスカッション終了後、翌日の午後に控えた「公開プレゼンテーション」の打ち合わせをファシリテーターと振付家・ダンサーとの間で行った。

最終日は15:00から「公開プレゼンテーション」が開かれ、当財団からの告知によって約40名の聴衆が集まった。セミナーに関する概要説明の後、参加した各振付家・ダンサーが、期間中に話し合われた内容をもとに、自分がアーカイブというものをどのように捉え、今後どう取り組んでいきたいのかについて説明した。休憩を挟んで行われた「公開ディスカッション」では、ファシリテーターの武藤大祐が司会を務め、オン・ケンセンが新しいダンス・アーカイブの手法とその可能性について語り、聴衆からの感想や質問を取り入れながら意見交換が行われた。

なお、2014年12月には、4月と同じメンバーが参加するセミナー「ダンス・アーカイブの手法」の続きが森下スタジオで開催され、各自がアーカイブ化に関するアイデアを発表し、そのアイデアに基づいた公開プレゼンテーションなどを予定している。

(編集部/文中敬称略)

## viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第68号

2014年8月31日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: [foundation@saison.or.jp](mailto:foundation@saison.or.jp)

●次回発行予定: 2014年11月末 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(92円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。